タルトゥ学派の文化記号論（ノートと翻訳）

近藤　喜重郎

1993年にタルトゥ記号論学派の代表的指導者ユーリー・ミハイロヴィチ・ロトマン Юрий Михайлович Лотманが永眠した。ロトマンは、ミハイル・バフチン、ドミートリー・リハチョフと並び、20世紀のロシアを代表する文学・文化研究者である（イェゴロフ：216）。ロトマンが主宰したタルトゥ学派は、「諸学の基礎科学として現代世界に着実に根を下ろした」（ロトマン1998：366）と言われる文化記号論を、アメリカのパース系の記号論とも、ヨーロッパのソシュール系の記号学とも一線を画した形で論じていることで知られている。ロトマンが主編者として発行してきた『記号体系研究』（Трудыпо знаковым системам。以下Ｔ３Ｃと略記する）は、ロトマン死後、タルトゥ大学でロトマンの講座を引継いだ記号論学者ピェテル・トロップの編集により継続され、タルトゥ学派の記号論を発信し続けている。

ロトマン最初の記号論研究とみなされているのは、1964年に発表された『構造詩学講義』であるが、トロップ（トロップ1999）によると、タルトゥ学派の文化記号論誕生を告げた研究は、1973年にロトマンがイワーノフ、トポロフ、ピャチゴルスキイ、ウスペンスキイらと共に発表した「文化の記号論的研究のためのテーゼ」[1]であるという（おりしもこの年にC・ギアーツがニューヨークで、R・バルトがパリで、K・ロレンツがミュンヘンで文化に関する研究を公にしており、この時代的一致にトロップ（トロップ1999）は注目している）。この時期のロトマンおよびタルトゥ学派の記号論は、言語、テクスト、構造、モデル、（第二次）モデル形成体系といった諸概念を用いて論じられている。

70年代のロトマンとタルトゥ学派について「理論武装が重過ぎる」と言われることがあるが（田島・由良：93）、その一因は彼らの研究環境によるのである。旧ソ連時代には、構造主義的記号論研究は、1920年代にソ連で排斥されたフォルマリズムの再生ではないかという疑念を国家体制側にもたれた。ソ連時代にロトマンが主催した「サマー・スクール」[2]とその論文集に対して常に監視と抑圧が加えられたため、彼は入念な学問的準備をしなければならなかった。例えば、ロトマンは、最初の記号論的著作『構造詩学講義』の序の中で、構造論を用いてソ連体制下における記号論研究の正当性を主張している（ロトマン1978：4－14）。また、この時期のタルトゥの記号論は、通信理論を前面に出して論じられているところに特徴があるが、このこともまた旧ソ連体制下における記号論研究を擁護するという目的に適ったものであった。

また当時、ロトマンの「スクール」に参加した人々は、自らの用いるメタ言語の詳細について議論するのではなく、それぞれの異なる用語の相互翻訳の可能性を議論した。これがタルトゥ学派の特色のひとつである相互翻訳性につながった。タルトゥ学派のこれらの議論と主張は、R・ヤコブソンに通ずるものであるが、特定のイデオロギーの正当性を主張して他

を退けるという旧ソ連体制下の人文科学研究の流れへの批判を示唆するものであるため、旧ソ連体制下では危険視された。

その後、ロトマンの研究は、構造論、通信理論だけに留まらず、記憶の分野にも踏み込み、さらに脳科学、認知科学の展望をも視野に入れたものになった。これは、記号の原理は本来、脳あるいは認知の機能への言及抜きには語れないためである。また、従来の記号論が扱ってきた分野は、記号過程に反映された生物の認知機能、認知プロセスを解明しようという認知学の見地から改めて問い直される一方で認知学における仮説もまた記号論の立場から検証されるべきであるとタルトゥ学派は主張した。これらはテクストの機能分析をすれば当然そうなるべきものであり、諸外国の記号論の動向と一致していた（ロシアにおける記号論の発展を支える幅広い流れについては磯谷孝氏の「現代思想へのソヴィエト文化記号論の寄与」（『講座記号論Ⅰ』勁草書房、1982年、38－89頁）を参照されたい）。

このように研究手法が多岐にわたるために、またタルトゥ学派の文章には、いわゆる文学研究、歴史研究では聞きなれない様々な分野の用語が出てくるためにタルトゥ学派の文化記号論をその全体として把握するのは容易ではない。例えば、物理的刺激と感覚の数量的関係を研究する学問である心理物理学（あるいは精神物理学）（ボーア：136）がタルトゥでは用いられている。また、R・ヤコブソンによって言語学の観点から使用された（ヤコブソン：3－4）、量子力学において光の運動は粒子として捉えるか波動として捉えるかという論争を通して生まれた概念、「相補性」（ボーア：96、124ほか）も、タルトゥ学派も積極的に利用した。さらに、生物地質化学者ヴェルナツキイの「生物圏」に着想を得て、ロトマンが用いた「記号圏」という概念は、彼の文化記号論の要としてよく知られている。

ロトマンの文化記号論についてさらに述べておかなければならないのは、その「偶然」の概念である。ロトマンの言う「偶然」とは、あるシステムにとって予定していなかった要素がそのシステムに侵入した時、その侵入および要素はそのシステムにとって「偶然」のものとして認知されるという意味のものである。I・ポルティス・ウィナーは、ロトマンとБ・ウスペンスキイを、文化における偶然と必然の問題に踏み込んだ研究者として評価している（ポルティス・ウィナー：62）。なお、トロップは、以下に紹介する翻訳を見ても分かるように（60頁）、文化の動的過程の促進剤が「偶然的」テクストであると述べているが、ロトマンの文化記号論を紹介するという文脈においてはこの「偶然」をもっと強調すべきではないかと私は考えている。

さらに、タルトゥ学派の文化記号論を紹介する際に忘れてならないのは、タルトゥ学派で言う文化の概念が文化人類学・比較文明学から示唆されたものであるという磯谷氏の指摘である。磯谷氏は、「いわゆる文化の概念は、文化圏の内と外、それへの編入とそれからの排除という原理のうえに成り立ち、文化は、もっぱら、その文化に所属する者の目で内側からながめられ、非文化は考慮の対象外とされた。こうした内在的視点にもとづく、文化の記述は静態的体系性を特色とする。これに対して、タルトゥーの記号論研究者は、むしろ、文化・非文化の対立、相関そのものを文化と見なそうとするのである」（ロトマン1998：360）と述べているが、このことによって、氏が言うように、「時間の流れとしての歴史は、それ

ら文化、文明の発展、変遷、あるいはパラダイムの発展、変遷として捕えることが可能になる」のである（ロトマン1998：360）。

磯谷氏の触れた文化・非文化の対立の概念は、後にロトマンによって、文化の記号メカニズムの最小単位として「我々」と「彼ら」の二項対立という形でまとめられていった（ロトマン1994：175）。実際、この二項対立は、現実のテクストにおいては隠喩的二項対立の「束」として機能するが、一方、文化はこの「束」を保存し、後景化する傾向にある。ただ、この「束」の中からひとつあるいはいくつかの対立を前景化させるテクストも現れることがある。これは、それが属す文化圏にとっては「偶然」のものであるが、この「偶然」によって文化の動的過程が始まることがある。それゆえ、文化の「偶然的」テクストは、トロップの言葉を借りれば、その動的過程の「起動装置」にも「促進剤」にもなる一方で、「抑制剤」にもなるのである。それゆえまた、「我々」と「彼ら」の二項対立の「束」がいかなる意味を含んでいるか、そして、それをいかに前景化させるかという問は、現代文明を見る上において主要な問題となる。そして、この問を考察することのうちに記号論semioticsに基づいた倫理学ethicsすなわち「記号倫理学semioethics」という分野が生まれるのである。

モノグラフを含めると800余を越える著作をロトマンは遺しているが、それらのうち以下の三点を紹介して本研究ノートを終わることとする。

- 『文学理論と構造主義』磯谷孝訳、勁草書房
- 『映画の記号論』大石雅彦訳、平凡社
- 『ロシア貴族』桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳、筑摩書房

最初の二点はロトマンの記号論の形成と発展を知る上での手がかりを供する。また、最後の一点は、ロトマンが、トロップの言う、現実のテクストへの関心を実現した文化記号論を著述した後期の著作である。

主要参考文献

- アンドリューズ：エドナ・アンドリューズ『ロートマンの文化記号論入門』（谷口伊兵衛訳）而立書房、2005年
- イェゴロフ：Б.Ф. Егоров. От Хомякова до Лотмана. Москва. 2003 г.（イェゴロフ著『ホミャコフからロトマンまで』モスクワ、2003年）
- 田島・由良：田島節夫・由良君美「対話・言語論の現在」『現代思想』1979年4月号
- トロップ1992：П. Тороп. Тартуская школа как школа // В честь 70-летия профессора Ю. М. Лотмана. 1992 г.（トロップ著「学派としてのタルトゥ学派」『Ю・M.・ロトマン教授70歳記念論文集』、タルトゥ、1992年）
- トロップ1999：P. Torop. Cultural semiotics and culture // Sign Systems Studies. vol. 27. 1999.
- 船倉正憲：「生物記号論から地球環境記号論へ」『記号論の逆襲』東海大学出版会、2002年

・ボーア：『ニールス・ボーア論文集1』（山本義隆編訳）岩波書店、1999年
・ポルティス・ウィナー：I. Portis-Winner. Semiotics of Peasants in Transition: Slovene Villagers and Their Ethnic Relatives in America. Duke University. 2002.
・モノー：J・モノー『偶然と必然』（渡辺格・村上光彦訳）みすず書房、1972年
・ヤコブソン：ロマーン・ヤーコブソン『一般言語学』（川本茂雄監訳）みすず書房、1973年
・ロトマン1994：Ю.М. Лотман. Внутри мыслящих миров. М. 1994 г.（ロトマン著『思考世界の内部で』モスクワ、1994年）
・ロトマン1998：ユーリー M.ロトマン『文学理論と構造主義』（磯谷孝訳）勁草書房、1998年（第一版は1978年）

翻訳

（訳注：ここに訳出したのは、1992年にエストニアのタルトゥで出版されたВ честь 70-летия профессора Ю. М. Лотмана（Ю・М・ロトマン教授70歳記念論文集）の冒頭を飾っている、Пеэтер Тороп（ピェテル・トロップ）の論文Тартуская школа как школа（学派としてのタルトゥ学派）の第二節「学説としての学派」である。この論考で彼は、タルトゥ記号論学派のコンテクストによって自らの学派を説明するという方法を試みている。すなわち、この論考ではタルトゥ学派の自己分析がなされているのである。その中でもここで訳出した第二節は、訳者の考えでは最も主要な部分である。第一節と第三、第四、第五節はタルトゥ学派及び旧ソ連の学問環境を伝えるものである。こうしたものはすでに日本でもいくつかの紹介があるため、今回は割愛した。）

第二節　学説としての学派

タルトゥ学派は、統一した方法論的学説をもたない。だが、ТЗС［論集『記号体系研究Труды по знаковым системам』］の第一号がЮ・М・ロトマンの著書『構造詩学講義』（1964年）であるということを想起すべきであろう。これはオーソドックスな著書ではないが、それでもやはりこれは、オーソドックスな記号論の著書、Ю・И・レヴィンの言葉によると、唯一の記号論的理想家の著書である。

その一方で、第二号（すなわち最初の合作）は編集委員会の次のようなメモを伴っている。「神話、フォークロア、儀礼、文学、造形美術を記号的モデル形成体系とみなすとき、触れざるを得ない諸問題の領域があまりに多様であり、また未解決の問題の数があまりに多いので、［記号論研究のためにロトマンが主催した］サマー・スクールの参加者たちが常にうまく統一した見解に至るというわけではなかった。編集者一同は、視点を人工的に統一することが有益だとは考えなかった」。実際、この号の執筆者たち、すなわち、Ю・И・レヴィン、Е・В・パドゥチョノヴァ、А・М・ピャチゴルスキイ、И・И・レヴズィン、В・Н・ト

ポロフ、ウスペンスキイなどという、かくも輝かしい巨匠群を統一することは果たして可能だろうか。

しかし、このことは単に、手本となるグループ――このグループの作品に沿って「諸研究の最前線」に関する概念を得ることができた――に対する敬意というわけではない。各執筆者の個人的スタイルと意見に敬意を払うということは、最新の論集においても大切な原則である。ロトマン自身は、次のように回想している。「学問の統一が強調を飲み込まないようにするための戦いが続いていた、<…>文化の一部としての学問は、個性を保存しなければならない」。

事実、本質的な説明をすべきである。個性をこのように尊重することは、人間として求められる主要な指標が（[問題に] 精通していることと職業の要求に加うるに）誠実さであるような特定の人々の間でのみありうることだ。だから、Ю・М・ロトマンは次のように書いている。「我々は、共通の基盤――無条件の学問的公正さを有していた」。Ю・И・レヴィンも「騎士のような風格」について語っている。

この独特の専門的倫理的状況は学説に対しても直接的な影響を及ぼした。Б・М・ガスパロフは次のように回想している。「タルトゥ共同体の雰囲気は、学際的交流と協力のために理想的な条件を作り出していた。私はすでに、記号論学者の自己理解が［各自のキャリアにおける］はじめからの専門上の所属によってというより、むしろ共通の知の目的によって規定されていたということについて語ったことがある」。実際、タルトゥ学派の著作の中ではこの心情の統一、研究対象の構造性と体系性を理解しようとする志向がこのように統一されていることを目標とすること、そして文化の多様な言語の記号論的記述のための手段の探求が見られる。

しかし、学説の観点からは、タルトゥ学派には学問におけるもうひとつの事件が加わっているということを想起することが重要である。1962年の大会の研究資料を基礎に、1964年にはタルトゥで最初の『ブローク論集』が出版されたが、これは経験論的方向性を有している一方で、やはり同様に執筆者たちの個性を尊重している。Ю・М・ロトマンによって編集されたT3Cが学問的伝統の統一を復興させたとするなら、З・Г・ミンツの編集した『ブローク論集』は、学術的研究対象のひとつ――А・ブロークの作品とシンボル体系を復権させた。これら二つのシリーズの間には自然の相補性の関係があった。記号論的論集［T3Cのこと］は、様々なタイプの対象の記号論的研究の可能性を反映し、ブローク論集は、様々な手法の助けを借りて一つの対象の分析を提起していた。これは深く象徴的な相補性である。

この相補性は、タルトゥ学派の内部では理論的研究と経験論的研究の統一を示唆している。タルトゥの記号論を抽象的あるいは演繹的と呼んではならない。理論は、基本的にはこの目的について、具体的な対象の研究のためにタルトゥ記号論の中で構築されている。学術界におけるこれらの理論に対する関心と人文科学の発展に対するそれらの影響は、手本になるグループのメンバーの博学さに結びついていた。むしろ、タルトゥ学派の代表者たちは、資料を深く認知しているおかげで理論的大胆さを自分たちに許すことができたのである。それゆえ、かくも良い対照をなしているのは、模倣的研究である。その執筆者たちは、流行の犠牲

者であるかあるいは記号論に対する本当の関心の犠牲者でさえあるが、研究対象を素朴さにまで単純化している。ひとつの詩の多くの分析は、その良い例でありうるのだが、その中では、テクスト外的関係を単純に拒否しているのではなく、それを知らない研究者の内在的構造主義と、内在性がほとんど常にコンテクスト的である構造主義的記号論的アプローチの間に相違が見られる。メタ言語の形式化がタルトゥ学派のメンバーの興味を引くことが比較的少なかったということは注目に値する。タルトゥ学派は、共通の学説、統一された方法論、統一されたメタ言語を持たないから、部外者の観察者にとっては、あるいは混沌としているように、あるいは錬金術的なものに見えるだろう。［タルトゥ学派が］混沌としているという印象は、別種の資料の分析の理解のための知識を持たず、経験論のレベルを捨象し多様な作品の中にある思考（記号論的思考）のタイプの共通性を見出すことのできない人々の間で生じる。混沌の印象は、別種の専門用語の量によってもさらに深められる。T3Cの論集にあるメタ言語の多彩さの中に、「よそ者たちには」理解しがたい独特の「タルトゥの隠語」を見出そうとする人々にとっては、この学派は錬金術的に見える。

確かに、タルトゥの論文を読むのは難しい。というのも、ある論集では多様な学術規範のメタ言語と出会うので、同じ用語が異なる意義において用いられるかもしれないというようなことなどがあるからだ。しかし、その一方で、タルトゥの論文を読むのは簡単だと言うことができる。なぜならば、学問一般の用語法と本来的に記号論的アプローチと結びついているいくつかの概念、すなわち、第二次モデル形成体系、範列論、統辞論、二項対立などの知識だけが必要だからである。タルトゥの著作における統一とメタ言語の正確さの欠如は、そのメタ言語の日常言語への翻訳が比較的簡単にできることによって補強されるため、好意的な読者の理解にとっては障害になりえない。なぜならば、記号論的思考、対象の構造化の多様な手法の統一された基礎、そしてその研究の特性を理解するためには、かなり多くの視点が必要だからである。

思考タイプのこの統一は、論集が出されるにつれて対象に関する観念もその研究手法に関する観念も変わっていっても保たれている。タルトゥ学派のメンバーの思考は、彼らによって適用された概念あるいはメタ言語より正確である。しかし、不正確な（一義的でない）言語で正確に思考する――この中に学問発展の諸条件のひとつがある。

メタ言語の相互翻訳性は、タルトゥ学派内部では相互理解の必然的条件であった。しかし、一方では、方法論的かつメタ言語的押し付けの欠如は、また他方では、世界中での記号論の発展は、1980年代の初めに［この］学派内部で記号論の発展における二つの傾向を認識する必要性をもたらした。第一のものはメタ言語の正確化すなわち正確なモデル化へ向かう志向と結びつき、もうひとつは現実のテクストに対する関心と結びついていた。第一のものはIO・M・ロトマンの意見によると、メタ記号論の中において実現し、もうひとつのものは文化記号論の中において実現している。

その時期までにIO・M・ロトマンの見解はすでに一定の発展を体験していた。つまり、彼のテクスト理解は、言語の表明から自ら言語を生み出すものへと変わっていたのである。IO・M・ロトマンの最初の記号論的著書である『構造詩学講義』（1964年）の主要なパトス

は、芸術のそれぞれの形式は個々の言語を有し、そして例えば、自然言語のうちに定着した芸術テクストは、自然言語に対する作者の特別な関係のおかげで、独自の意義を獲得するので、言葉の辞書的一致のレベルでのテクスト理解は、単にテクストの曲解に過ぎないということにある。すなわち、自然言語は、芸術テクストにおいてはより高いランクの言語すなわち第二次モデル形成体系となる。

このことから、Ю・М・ロトマンにとって言語レベルにおいて様々な指示対象をもつ［複数の］語は、テクストレベルにおいては共通の指示対象を持つことができるということが結論として出てくる。「つまり、内容の問題は常にコード変換の問題である」。ここから、今度はこちらから、テクスト内的・外的関係の交差の点においてテクストの研究（および定義）の必然性が出てくる。それに応じて、テクスト研究の構想には、文化システムにおけるサブテクスト的（一般言語の）意義とテクスト的意義およびテクストの機能の区別が含まれる。同じように理解されるのは次のような三つのレベルで記述される文化である。すなわち、サブテクスト的伝達の記述、テクスト体系としての文化の記述、そしてテクストを操作する諸機能の総体としての文化の記述。

この構想を実現したのは理論的著書である『芸術テクストの構造』（モスクワ、1970年）と実際的分析をも含む著書『詩的テクストの分析　詩の構造』（レニングラード、1972年）である。

このアプローチは、二重の、メタ言語的かつメタテクスト的（神話化的）記述の導入の結果で変化する。それに応じて、（言語的、テクスト的、文化的）世界受容の二つの方法も区別され、またその過程における論理的受容と神話化的受容の一致が現れる。周囲の世界の受容は受容する者の記憶と不可分であるので、どのテクストの構造の中においても特定のタイプの記憶へのこのテクストの方向づけが現れる。論理的［受容］と神話化的［受容］の二項性から、現実に即した記号体系の大半が言語の二つのモデルすなわち静態的モデルと動態的モデルの間に位置すると、一方あるいは他方に近づきながらモデルの間に位置するという主張が出てくる。静力学と論理学に基づいて一次的情報があり、動力学と神話学に基づいて二次的情報がある。この二つの極は緊張の場を作り出し、その場において統一された複雑な全体すなわち文化が発達するのである。

文化と人間の意識の類似性をも暗示することができる。そして文化をЮ・М・ロトマンは、個人の意識の欠点を補う超個人的知性と呼んでもいる。

次のステップとなるのは、脳の二つの半球体の総合、統一体としての人間の自然的意識、一次的体系と二次的体系、論理的体系と神話的体系、離散的体系と非離散的［連続的］体系といった二つの（言語）体系の最小［単位］の存在、集団的知性としての文化といった、機能的かつ構造的に類似した「知的対象物」の比較である。

Ю・М・ロトマンのその後の理論的研究の中では、大部分において（たいていは暗黙裡に示されているとはいえ）世界の記号論における探求と接触のあることが反映されている。このことは、神経記号論の諸問題、神話性と象徴性、グローバルな一般的レトリック、В・И・ヴェルナツキイとИ・プリゴージンなどの著作に対する新たな関心と関わりがある。

一方では、言語、テクスト、文化の生成過程の同型性について、またより高次の記述をするために頭脳の機能化に関する心理物理学的データを用いる可能性について述べることができる。科学的思考においてアナロジーを採用することの長所と危険性について語りながら、Ю・M・ロトマンは次のように主張している。「このことは、脳の非対称の領域における新たな発見と文化の記号論的非対称の間のアナロジーに十分当てはまる。なによりもまず、左半球あるいは右半球に対する複雑な文化機能を固定する試みについてこのことを述べるべきであろう」。それでもしかし、同じ論文には次のように書かれている。「最も重要なことが残っている。それはすなわち、すべての知的構築物が二極的構造あるいは多極的構造をもたねばならず、また個々のテクストや個人の意識から民族的文化及び人類の普遍的文化としての教育までの多様なレベルにおけるこれらの下部構造の機能はアナロジー的であるという確信である。（中略）多構造的な記号論的ジェネレーターを結びつける二回線的（最小の）構造としての文化理念は、神経解剖学的基礎を得る」。

この土台には閉じられた抽象的空間として定義される記号圏の概念も支えられている。そして、その内部ではただ「伝達過程の実現と新情報の生産とが可能であることが分かっている」。記号圏の理解は、脳の機能理解と不可分である。すなわち、「人間の個性あるいは個々のテクストから地球規模の記号論的単一性に至る記号圏のすべてのレベルが相互に内部に含み合う記号圏であるかのようなものである以上、それら記号圏のおのおのは、対話の参加者（記号圏の一部として）であると同時に対話の空間（記号圏全体として）であり、それぞれの記号圏は、右脳的傾向あるいは左脳的傾向の特性を現しており、またより低いレベルでは右脳的構造と左脳的構造［の両方］を自らに含んでいるのである」。

その一方で、Ю・M・ロトマンは、テクストの構造と語用論から伝達の可能世界へと自分の関心を移している。彼は、交流の概念を導入して「『消費者はテクストを解読する』という定式の代わりに、おそらくはより正確な［定式］『消費者はテクストと交流する』」を主張している。交流の基礎をなしているのは以下の過程である。すなわち、受信者と発信者の間の交流、聴衆と文化的伝統の間の交流、読者と読者自身の交流、読者とテクストの交流、テクストと文化的コンテクストとの間の交流。

これらの交流の過程の記述においてЮ・M・ロトマンは、地球規模のテクスト理解に到達している。そして、文化も、テクストとして検討されている。「それは、『諸テクストにおける諸テクスト』の階層構造から成りかつ諸テクストの複雑な絡み合いを形成している、複雑に作り上げられたテクストである」のだが。この文化テクストに都市（例えば、ペテルブルグ）もまたテクストとして、また同時に諸テクスト生成メカニズムとして含まれるのである。

複雑な記号体系の相乗、均衡、均衡の破壊（「無秩序な変化」まで）に対する関心は、世界の記号論にとって当然のことである。このことは、ある時代――その時代の中で個々の新しいテクストは、この空間に加わりながら同時にこれを変容しながら、「ありえないこと」として出現するのである――の芸術的思考におけるプロットの空間に及ぶ。すなわち、ある体系の中にある新たな偶然的現象は、その体系の機能に変化をもたらすことができるのである。このことは、技術的進歩、すべての文化の受容に影響を及ぼす物質的周辺世界の変化の

現象にも関係させることができる。こうした体系的アプローチは、「生成の諸要因」（すなわち法則的な参加者と諸要素）および「触媒」の複雑な体系の中にある相違の不可欠性へとIO・M・ロトマンを導いている。ここでいう「触媒」とは、「ありえないかあるいは偶然の参加者あるいは要素」である。こうして、所与の文化あるいは文化的状況にとって偶然的な諸テクストは、文化の動的過程の「起動装置」あるいは促進剤、あるいは抑制剤として現れえるのである。

記号論学者IO・M・ロトマンの進化を観察するこの短い一面的な試みは、この研究者の探求の論理を線状化し単純化しているが、それでもやはり、若干の結論を出すために適した基礎であると思われる：

1）多くの「ロトマン」すなわち弟子たちから偶然の読者に至るIO・M・ロトマンの多様な追随者たちは、彼の視座の発展におけるなんらかの一つの契機を自分のために現実化できるだろう。この現実化に沿って、記号論あるいは全体としての人文科学の発展のためにIO・M・ロトマンの個々の研究あるいは理念の生産性について語ることができるだろう。

2）T3Cの主編者としてIO・M・ロトマンは、他の執筆者たちに対しては後の事実として論集の多様な研究を統一し枠にはめ込む記号論者である。それゆえ、T3Cは、よく「ロトマンを通して」読まれ、彼の研究はタルトゥ学派の「概念作用的な骨組み」となる（この意味でこの学派は深くタルトゥ的なのである）。

3）ロトマンにおいてはひとつのメタ言語に定式化された記号論的学説はなく、そのような学説の探求はIO・M・ロトマンの視座が矛盾しているという感覚をもたらす。

4）IO・M・ロトマンは、方法論的専門家というよりはむしろ同じことについて永遠に長く多面的に考える思想家である。この思想家的過程において彼は不可分であり、生産的であり、人に影響を及ぼしやすい。

5）タルトゥ学派は、自らの原理原則をもつとはいえ、唯一の普遍的な方法論的学説、唯一のメタ言語そして規範化された研究方法の組み合わせというものを提示していない。タルトゥ学派の学説、これは、記号論化する思考、構造的・体系的世界認識の一つの独特のタイプである。その枠内では、最も多様な概念、研究対象、そして研究者の個性は、相補性の関係にある。それゆえ、この学派の枠内で、オーソドックスな記号論とオーソドックスな諸々の記号論について語ることは難しい。この相補性には顕在化した「理解する」方法論よりも主として特別な潜在化した方法論の方が基づいている。

---

[1] 邦訳がある。「文化の記号論的研究のためのテーゼ」（磯谷孝訳）『現代思想』1982年9月号

[2] ロトマンは、自分の主催した集まりを、「研究会」や「学術会議」と呼ばず、「スクール」と呼んだ。